中野高行『古代日本の国家形成と東部ユーラシア〈交通〉』

序章　問題の所在……1
一　古代国家形成と〈交通〉……1
二　石母田正の「交通」……2
三　妹尾達彦氏のグローバル・ヒストリー……7
1　「交通」と国家形成……7　2　農牧複合国家……9
3　仏教（世界宗教）・法律……11　4　都城の時代……13
5　儒教の王権理論……14　6　普遍的な価値と技術を担う人々……15
7　海岸港・河川港……16　8　ウォーラーステインの世界システム論……18
四　ブローデル……19
五　本書の構成……23
第一章　五・六世紀の国際関係像……33
一　分析の対象・内容と視点……33
二　五世紀に相当する『日本書紀』の外交記事①―朝鮮側の史料との比較―……34
1　『高句麗広開土王碑文』の特質……34　2　神功紀・応神紀の紀年……35
3　百済太子腆支の入質と即位……36　4　倭済間交渉の断絶と倭済同盟再結成……37

5　百済王都漢城の陥落……38
6　羅済同盟の完成＝倭済関係の重要性低下……40
三　五世紀に相当する『日本書紀』の外交記事②―『百済記』について―……41
四　六世紀に相当する『日本書紀』の外交記事―「任那日本府」を中心に―……46
1　日本府と倭国の関係……46
2　日本府と百済の関係……47
3　日本府と新羅の関係……49
4　「任那日本府」の構造と機能、および倭国との関係……51
五　『古事記』の外交記事……53
六　結　語……54

付論1　渡来系移住民
―普遍的価値・技術を担った人々―……59
一　帰化人と渡来人……59
1　「帰化人」という用語の問題点……59
2　「渡来人」という用語の問題点……60
二　五世紀の渡来系移住民……61
1　東漢氏……61
2　秦　氏……63
3　上毛野の渡来系移住民……63
三　六世紀の渡来系移住民……64
1　船史系氏族……64
2　上毛野の渡来系移住民……64
3　吉備・美作の渡来系移住民……66

四　七世紀の渡来系移住民……66
1　鞍作氏……66　2　新漢人……67
3　大化改新・白村江の戦いと渡来系移住民……68
五　八・九世紀の渡来系移住民……69
1　律令と渡来系移住民……69　2　朝鮮三国の国名を冠した郡……70

第二章　継体天皇と琵琶湖―淀川水系……75
問題の所在……75
一　継体天皇関連遺跡……76
1　今城塚古墳……76　2　太田茶臼山古墳……78　3　摂津三島古墳群……78
二　継体天皇の血縁関係―近江息長氏を中心に―……79
1　継体天皇の系譜……79　2　継体天皇の后妃……81　3　息長氏……82
4　安閑・宣化天皇の后妃……85　5　開化天皇の後裔……85
三　継体天皇の三宮と淀川水系の港津……86
四　琵琶湖―淀川水系流域の諸氏族……90
結　語……95

第三章　日本海沿岸諸地域と新羅・加耶……115
問題の所在……115
一　古代日朝をめぐる伝説……116
1　瓠　公……116
2　第四代新羅国王脱解尼師今（昔氏初代の昔脱解）……116
3　延烏郎・細烏女伝説……118
4　天日槍伝説……119
5　都怒我阿羅斯等伝説……120
6　出雲国引き神話……121
二　古代日本海域の交易の実相……121
1　越　後……122
2　江　沼……123
3　越　前……123
4　若　狭……125
5　丹　後……126
6　但馬―円山川水系―……130
7　出　雲……134
8　壱　岐……136
9　筑　前……137
10　朝鮮半島……138
結　語―ヤマト王権との関係―……139
第四章　天智朝創建寺院と正史……155
問題の所在……155
一　朱鳥元年の「五寺」と大宝年間「四大寺」の創建記事……156
1　小墾田豊浦寺……157
2　元興寺（法興寺・飛鳥寺）……157

3　坂田寺（金剛寺）……158
4　大安寺（百済大寺・大官大寺）……159
5　弘福寺（川原寺）……159
6　薬師寺……160
二　天智朝の寺院建設記事の特徴……161
1　崇福寺……161
2　筑紫観世音寺……164
三　法隆寺西院伽藍の創建と上宮王家所有の名代……165
四　舒明―天智系寺院の伽藍配置……168
結　語……172
第五章　唐・新羅戦争前後の新羅と倭国……185
問題の所在……185
一　「白村江の戦い」前後の倭国……186
二　百済滅亡後の新羅……188
1　金馬渚の小高句麗……188
2　漢城の小高句麗……189
3　遼東の小高句麗国……189
三　「唐・新羅戦争」後の新羅……193
四　「白村江の戦い」後の倭国……197
結　語……202

第六章　高麗郡建郡の背景……209
問題の所在……209
一　高麗郡関係史料と高麗王若光……209
1　高麗郡建郡記事……210
2　常陸国への高麗人移配記事……212
二　建郡前後の高麗郡 ―考古学的視点から―……213
1　古墳時代～奈良時代の高麗郡 ―集落の形成状況―……214
2　移住の痕跡……216
三　高麗郡建郡と新羅郡建郡……219
四　高麗郡・新羅郡の建郡と武蔵守・入間郡領……221
1　高麗郡建郡と武蔵守大神朝臣狛麻呂……221
2　高麗郡建郡と入間郡領物部直（入間宿禰）氏……223
3　新羅郡建郡と武蔵守高麗朝臣福信……224
五　朝鮮系三郡と仏教……226
結　語 ―高麗郡建郡の史的意義―……231

付論2　『令集解』の注釈書……243
一　問題の所在……243
二　『古記』について……244
三　『令釈』について……247
四　『跡記』について……250
五　『穴記』について……252
六　『讃記』について……256
七　『朱記』について……259
八　『令集解』注釈書をめぐる論争の特徴と今後の課題……262

第七章　承和度遣唐使発遣と遣新羅使紀三津……271
問題の所在……271
一　承和度の遣唐使出国までの経緯 ―小野篁と紀三津を中心に―……272
二　遣新羅使紀三津の帰朝記事……282
三　執事省牒の諸問題……289
1　「主司」と「所司」……289
2　紀三津の行動の問題点……290

四　小野篁と『続日本後紀』編者の春澄善縄の関係……293
結　語……295

第八章　渤海国王宛慰労詔書の〈斗牛〉……301
問題の所在……301
一　〈斗牛〉についての辞典類の説明……301
二　「北斗七星」「牽牛星」「斗宿」「牛宿」……303
三　「禰軍墓誌」の「牛斗」の検討……304
四　蘇軾「前赤壁賦」に対する解釈……306
結　語……308

付論3　高校における朝鮮史教育の展望
—前近代を中心に—……311
一　問題の所在……311
二　新学習指導要領における歴史系科目……312
三　朝鮮史教育の可能性……315
四　朝鮮史研究と朝鮮史教育……318

五　教育現場のトレンド……322
六　総括と若干の補足……325

終章　総　括……341
一　問題の所在……341
二　各章の結論と課題……342
三　日本古代の都城と王都（ミヤコ）……352

あとがき……359

索　引……1
事　項……1　寺院名……2　人名・氏族名……3
史料名……5　研究者名……7

〔凡例〕

・史料の引用に際しては、論旨に特に関わる重要なものは解釈を示すため読み下し文とし、それ以外は原文に返り点を付した。

・本文中における研究者名について、故人については敬称略とした。

・明治以前の年紀については基本的に元号を併記した。明治以降は西暦表記としたが、研究史などで年代観に言及する必要がある場合には元号を併記した。なお日本列島を中心に朝鮮半島・中国大陸の史料を用いるため、必要に応じて該当地域の諸王朝が用いた元号を併記する。

・〈　〉内は、キーワード、あるいは特別な意味を付加された語句であることを、《　》内は、行論において重要な概念であることを意味する。

序章　問題の所在

一　古代国家形成と〈交通〉

「交易」の進展にともなう「市場」「人的ネットワーク」「統治システム」の形成は権力の成立に大きく関わり、外交交渉を含む対外関係（国家間の交流）の根幹を成す重要な研究分野であると考える。「市場」での秩序維持のために商取引（交換）の実効性を保証する強制力や、取引にともなう紛争を調停・仲裁する法的支配が発生し、これらが初期国家の権力として収斂していく。権力は「計算」や「法」に詳しい官吏に税収管理や行政執行を担わせて「人的ネットワーク」に組織していき、これが初期国家の官僚機構として王権の権力基盤となっていく。「市場」で形成された「統治システム」は、最終的に国家運営の基本原則となり国家の政治的基盤になる。これらの動きを総合する〈交通〉概念を措定することにより、日本の古代国家形成について考察していきたい。

行論の便宜上、一般的な交通や各論者の説明文中の交通は「交通」と記し、各論者の見解を整理・再定義した広義の交通概念を〈交通〉と区別して記すこととする。

二　石母田正の「交通」

一般的に、人あるいは物が、ある地点から別の地点まで移動することと定義されている「交通」について、石母田正は複数の側面から新たな概念として規定した。[1] 石母田により概念規定された「交通」は、次の通りである。

経済的側面では、商品交換や流通や商業および生産技術の交流であり、政治的領域では戦争や外交をふくむ対外諸関係であり、精神的領域においては文字の使用から法の継受にいたる多様な交流である。[2]

石母田による「交通」の政治的領域（戦争や外交をふくむ対外諸関係）については、別に国家成立過程との関連から論じたが、[3] いま一度「交通」の〈政治的領域〉に関する石母田の言説を整理しておく。石母田は、従来の「内政還元主義」が対外関係または外交を、内政とは別個の性質をもち、独自の領域を形成しているものとし、「内政から相対的に独立した契機であることを正しく評価しない誤りをおかすことによって、同時に内政そのものを矮小化し単純化するという二重の誤った思考方法にみちびく」[4] と批判したうえで、対外関係と内政の「相互関係と不可分の統一」を強調し、古代国家の初期段階について考究することの重要性を指摘する。

対外関係という一つの契機が一国の内政に転嫁してゆき、また逆に内政が対外関係を規定する基礎となるという相互関係と不可分の統一を、それが独自の形をとってあらわれる古代国家の初段階について、明らかにする必要があるのである。それには「対外交渉史」や「外交史」が、貴重な学問的貢献をしながらも、内政と外政とを単純に分離してきたためにひきおこしてきた伝統的思考方法を克服することが前提となる。[5]

卑弥呼は「所与の国際的諸条件を内政のために利用し、それによって狗奴国との紛争という国内矛盾を解決しよ

うと」した。「国際関係の中から、自己の政治目的を実現するための可能性を見出し、それを内政に転化し現実化する政治技術が、「外交」の一つの性質だとすれば、女王卑弥呼は素朴ながらここで「外交」をおこなっているの」だとする[6]（以下、傍線部は中野）。

その内部構造がいかに未開的で、「呪術からの解放」が未発達であっても、首長層は、対外的な面においては開明的であり得るのであって、ことに高度に発達した国との対外関係をもつにいたると、後者の側面は後進的な内部構造と対比した場合、不均衡に発達するのである[7]。

したがってアジア的社会のもとでは、他民族との交通が重要になればなるほど、その機能を独占する首長制＝王権は「開明的」となり、内部的地位はそれによって強化されるという傾向をもつのである[8]。

注意すべき点は、この系列の官が、いずれも邪馬台国と統属下の諸国との間に、あるいはそれらの諸国をふくむ倭国全体と中国との間に、成立しているという特徴である。それぞれのクニ＝共同体の内部にまず「官」が成立するのではなく、それら相互の間に、または外国と接触する場にまず「官」が成立することは、前記の首長制の特徴と密接に関連しているのである[9]。

「国家機構の萌芽が諸国間の境界領域の場にまず成立するという特徴」は、「商品交換の場合と同じく、「王」を首長とする諸国の内部構造がアジア的首長制を根底にしている」、すなわち弥生時代末期の北九州の首長層の「司祭的性格と機能」や卑弥呼の「禁忌に緊縛されたシャーマン的機能が政治に代位しているという特徴によって規定されている[10]」とする。

推古朝の「筑紫大宰」は天武・持統朝に整備され、令制の「大宰府」のような、対外交渉にあたりつつ、九国二島を統管する一大機構（「四海ノ小朝廷」）に成長する原型である。これに対して「推古朝の中央の政府組織は、こ

のような純粋な形の機構をもつことはできなかったのが特徴的なのである[11]」とする。

国際的契機により、外国と接触する場にまず「官」が成立するだけでなく、諸国家間の国際関係もさまざまな様態（上下関係や傾斜関係）を呈することとなる。

諸国の内部構造が支配と隷属を基礎にしている以上、諸国間の国際関係も対等であり得ず、冊封関係、君臣関係、朝貢関係がむしろ国際関係を規制する正常な原則となる[12]。

石母田によれば、国際的契機とは、このような国際的「交通」形態の一部（政治的領域におけるもの）である[13]。日本の古代国家成立史における国際的契機の役割を、七・八世紀の時点で考察した結果、最大最高の首長である中央の大王（天皇）を軸とした支配層が、中国・朝鮮の先進的な統治技術・国家機構・法典等を輸入・継受することにより、「国際的交通から疎外され、共同体的諸関係にしばられていた人民にたいする階級的優位を体制化する点」に端的に表れていると結論づけた[14]。

交通形態の一環としての政治面における外交と国際関係を七・八世紀の国家成立期に限定して考察する場合、それが三世紀または四・五世紀と異なった国際関係の新しい局面であり、それに対応する諸国の内政にも一つの特徴がみられることに注意する必要がある[15]。

とする指摘は重要である。

石母田は、「東アジアにおける戦争と内乱の新しい周期」の特徴として、朝鮮問題が国際関係を規定する主な領域として登場したことを挙げる。七世紀初頭は、それまで数十年間相対的に安定していた朝鮮三国間の内戦が激化した点で、朝鮮史の新しい局面をひらいた時期である。また、朝鮮における右の内戦の激化と諸国家興亡の歴史が、隋・唐両王朝の半島に対する侵略戦争または干渉戦争と、冊封体制を基礎とする外交によって特徴づけられ、それ

と不可分の関係をもって展開された。[16] 朝鮮三国にとって倭国は一つの政治勢力または「大国」として、外交上重要な地位をしめていた。特に倭国は、百済との特殊な結びつきによって、朝鮮問題とぬきさしならない関係の中におかれていた。百済滅亡時の海外出兵がしめすように、最終的には朝鮮における戦争に介入することとなり、半島の戦争は、朝鮮三国・中国・倭国など東アジアのすべての諸国家間における戦争に発展したことが、この時代の特徴である。[17]

石母田は、東アジア諸国間での戦争や外交が「王権の存立の決定的モメント」であり、内政と国制はそれと不可分の関係にあるとしたうえで、国内矛盾も激しい叛乱や政変・クーデタとなって表れるのがこの時期の特徴だと指摘する。[18] そのうえで、〈国家の成立の問題は、権力の問題である〉と結論づけ、「古代王権の基礎にある生産関係の集約」であり「総括」であるとともに、「個々の王権または支配階級がおかれた対外的諸関係もまた権力問題の一つの契機として、ことに古代においては不可欠の契機としてとらえる必要がある」とする。石母田は、「律令制国家成立の前史」が、この〈戦争と内乱の時期にあたっている事実〉を、たんなる偶然とはみなしがたいと強調する。[19]

右のような石母田の言説に基づき、国際的契機が日本の古代国家成立にどのような役割を果たしたのかを別に論じたが、[20] 本書では石母田の別の言説に注目して論を進めたいと思う。それは、石母田の「交通」の経済的側面（商品交換や流通、商業および生産技術の交流）と精神的領域（文字の使用から法の継受に至る多様な交流）である。

前掲のように石母田は、それぞれのクニ＝共同体の内部に「官」が成立するのではなく、それら相互の間に、または外国と接触する場にまず「官」が成立することが首長制の特徴と密接に関連していると指摘したのに続き、以下のように経済的側面に触れる。

前記の「国国市有り」といわれる場合の「市」が、それぞれのクニの内部の分業と交換の発展の所産としての

「市」ではなく、クニグニの間の、あるいは倭国と朝鮮・中国との間の交換の場としての公的な「市」であることは、女王がとくにそれを制御しようとしている事実からもあきらかである。（中略）邪馬台または弥生時代においては、朝鮮海峡は、朝鮮半島・大陸から倭国を隔離する役割よりも、反対に両者を結合させ、媒介する通路をなしており、そこに点在する大小の島々は、古典古代の成立期における多島海と同じ役割をはたした。[21]

石母田の「交通」では、政治的領域（戦争や外交をふくむ対外諸関係）に注目し、対外的契機のうち〈外交〉や〈戦争〉の重要性を強調する傾向が見受けられる。しかし、石母田の構想した「交通」においては、政治的領域と同じ程度に、経済的側面や精神的領域も重要なのである。記録に残りやすく、明確な痕跡を残す可能性の高い〈外交〉や〈戦争〉だけでなく、日常的に反復される〈生産〉〈流通・交換・商業〉などの経済的側面、社会構築のツールである〈文字〉〈法〉〈礼〉など精神的領域（〈慣習〉〈仏教〉〈儒学〉も加えるべきと考える）の受容は、古代国家成立を論ずる際に見過ごせない要素である。

石母田が、

またそれ自体五・六世紀の国際関係と交通の所産であり、各種の技術の導入によって王権の物的基礎を確立するために貢献した「帰化人」の技術は、やがて日本の人民の技術として獲得され、その生産力と民富を高める力に転化し、九世紀以降における手工業と商業の発展は、律令体制を解体せしめてゆく一つの動因になるのである。[22]

と強調しているように、〈生産技術〉確立に貢献した「帰化人」[23]たちは、精神的領域においても中国・朝鮮の〈文字〉〈慣習〉〈仏教〉〈儒学〉〈法〉〈礼〉の受容に大いに貢献した。

本書では、石母田の「交通」の済的側面・精神的領域に着目しながら、それらを媒介した「帰化人（渡来系移住

民）」の功績にも視野を広げて考察していくこととする。

三　妹尾達彦氏のグローバル・ヒストリー

妹尾達彦氏は著書『グローバル・ヒストリー』[24]において、世界史認識の視座設定に関する研究史と自説を展開している。当該書は妹尾氏が担当する講義の教科書として用いることを想定して刊行されたが、①妹尾氏の膨大な研究を簡明に整理していること、②引用される先行学説の質が極めて高く量も多いこと、③妹尾氏の最新の見解が記されていること、などの諸点から有用と考え、ここに参照することとする。

1　「交通」と国家形成

妹尾氏は、交通・都市・環境を分析の「三輪」とすると宣言し、「人類の歴史を従来とは異なる角度から、より総合的に見てみたいと考えた」[25]とする。「人類の歴史をできるだけ大局的に描こうとする時、都市と環境と交通という3つのことばが鍵となる」のである。交通とは、人やモノ（財貨）の空間移動を意味する狭義の用法ではなく、人と財貨に加えて情報・文化の伝達を含む広義の概念として用いられる。

狭義の交通は、〈移動の主体〉により旅客交通と貨物交通に分かれ、〈移動の場所〉に基づく陸上交通・水上交通・航空交通がある。〈交通機関〉には、交通路・運搬具・交通動力の三要素がある。このうち、「交通路」は、道路・航路・鉄道路・航空路などをさす。「運搬具」は、道路の場合は人や家畜（馬・牛・駱駝・驢馬等）・車輌（馬車・牛車・荷車等）・自動車等を、航路の場合は筏や舟・船舶等を、鉄道路の場合は汽車・電車等をさし、航空路の

場合は、航空機等をさす。「動力」は、人力や畜力・風力・水力等の非人工的（自然的）な動力と、蒸気力や石油燃焼爆発力・電力・原子力など人工的な動力とがある。「交通手段」は、前近代では人足・馬・牛・ラクダ等の家畜（駄獣）であり、「運搬具と動力は未分化」だった。しかし、近代になると蒸気力を始めとする人工の動力が発明され、「運搬具と動力源が分離して自然的制約から脱出することができるようになった」のである。[26]

これに対して、妹尾氏は広義の「交通」の諸機能について次のように整理する。

①経済的機能としては、経済距離を短縮して市場と労働供給圏を拡大し、産業の生産力を発達させて土地利用の機能分化と分業を進展させ、自然地域を経済地域に変える。[27]

②その一方で、近代における交通の発達は、交通の要に位置する大都市の資本の機能を強め、従来は相対的に自立性をもっていた地域を大都市の資本に従属させ、地域を生産地から消費地に変貌させて地域経済を弱体化し、経済格差を広げることがある。[28]

③思想・社会的機能としては、人間の力によって交通路がつくられることにより、自然界に対する人間界の優位を確立し、社会化された均質的な個人を生みだして社会の緊密化を進め人間同士を結びつける。[29]

④政治・軍事的機能としては、人やモノ、情報の流通を容易にすることで、為政者の行政機能や軍事力を強化して、より集権的で大きな政治組織の形成を可能とする。実際に、交通網の初期整備は、行政・軍事上の要請から国家が担う場合が通常である。[30]

⑤外交的機能としては、交通路の整備と管理の維持を前提にして、異なる国家間の外交関係の締結と継続が可能となり、国際関係を構築させる。[31]

人間の生活をなりたたせる経済・軍事・政治・文化は、すべて「交通」によって規定されているといっても過言

ではないとされ、「交通の歴史こそが人類史を読み解く鍵の一つとなる」のである。

交通の有無や発達の程度は、個人や人間集団の行動様式、地域や階層、身分の構造、機能集団のあり方に制約されるとともに、それらをつくりあげる働きもするのである。[32]

先述した石母田正の「交通」概念と、妹尾氏の「広義の交通の諸機能」を総合し私見を加味すると、〈交通〉（＝広義の「交通」）概念は次のように整理される。

〔政治・軍事的機能〕　戦争や外交をふくむ〈対外諸関係〉〈交通網〉

〔経済的機能〕〈生産〉〈土地利用の機能分化〉〈流通・交換・商業〉〈分業〉

〔思想・社会的機能〕〈自然界に対する人間界優位の確立〉〈社会の緊密化〉

〔精神的機能〕〈慣習〉〈文字〉〈仏教〉〈法〉〈儒学〉〈礼〉

本書では、このような〈交通〉概念の諸機能・諸側面に注目しながら論を進めていきたい。

2　農牧複合国家

妹尾氏は、歴史地理学の観点から「異なる生業の境界（ユーラシア大陸では遊牧地域と農業地域の境界が代表的・典型的）に接する地域が、交通の結節点となることで、都市と国家の形成を促す」という仮説を提示する。[33]

氏は、紀元前三千年紀（前三〇〇〇～前二〇〇一年）に北緯三〇度前後の大河川流域（ナイル川流域、ティグリス・ユーフラテス川流域、インダス川流域、長江・黄河流域）の複数の都市が連合し、初期国家が生まれたとする。[34] 前二千年紀末期～前千年紀前半に北半球で寒冷化と乾燥化が進むと、北方に拡大していた農業地域が乾燥化して農耕が困難となり、農業の代わりに移動する牧畜を生業とする遊牧地域が広がることとなった。[35] 遊牧地域の形成は遊牧民を

生み出す。馬・羊・山羊・ラクダなどの家畜や毛皮（「柔らかい宝石」と呼ばれた）・青銅器・金銀器などの工芸品と、農業民が生みだす穀物・服飾品・絹・木製器などの工芸品などの交易が盛んとなった。これにより、アフロ・ユーラシア大陸の主な交易の場が、大河川流域の北緯三〇度前後から、農業地域と遊牧地域の接する北緯三〇度～北緯四〇度に移動することになる。[36]

そして、前千年紀の遊牧地域における遊牧国家の形成が古典国家誕生の契機となった。[37]

古代寒冷期（前一〇〇〇年～前二〇〇年頃）、「遊牧国家と農業国家が南北に対峙する」古典国家体制がユーラシア大陸に生まれた。中世寒冷期（後二〇〇年～七〇〇年頃）には、再び年平均気温が低下し、ユーラシア大陸全域で大きな人間移動が生じた。中国大陸では三国・五胡十六国・南北朝時代、日本では古墳寒冷期にあたる。[38] 四～七世紀、アフロ・ユーラシア大陸の北緯三〇度～四〇度の地帯を主要舞台に、遊牧民の移動を契機として、人間の大規模な移住と文化の移動が生じた。四・五世紀の寒冷化と乾燥化にともない、遊牧民は家畜と共に枯渇した牧草地を捨てて農業地域に南下した。この変動を経て、農業地域の北端部に位置していた北緯三五度前後の地域は、「農業と遊牧・牧畜が複合する農牧境界地帯に変貌した」のである。[39]

古典国家は、四～七世紀におけるユーラシア大陸の大規模な人間移動によって解体し、

この動乱の中から、遊牧民ないし遊牧民の血を引く為政者が、農業地域と遊牧地域を広域に支配する農牧複合国家を創造した。[40]

とする。妹尾氏によれば、「交通幹線の変遷をてがかりに、環境の境域に立地する境界都市が政権の拠点地となり、「前近代の世界の構造は、環境遷移帯と文化接触帯に立地する共同体の間の境界都市と共同体内部の都市とが組み合わされることで誕生する」。「歴史の舞台となる境界都市は、農牧境界地帯から沿海地帯に移行」し、「近代

社会は、内陸から沿海への境界都市の移行とともに出現する」こととなる。[41] アフロ・ユーラシア大陸には、四～七世紀における「遊牧民の移動を契機として大規模な人間と物産の移動が生じた事件」と、十六～十八世紀における「西欧諸国の地球規模の海外進出を契機として大規模な人間と物産の移動を経験したこと」という二つの移動期がある。

この2つの移動期の人間と物産の移動は、技術・動物・疫病等の移動をともなっていたことでも共通する。[42]

アフロ・ユーラシア大陸の一度目の「大規模な人間移動」が終わる七世紀から始まる日本の律令制国家形成の動きは八世紀に一応の完成を見せるが、その間、人間（渡来人・帰化人）や技術（統治技術・手工業技術・築城技術など）、そして疫病の移動をともなっている。アフロ・ユーラシア大陸における一度目の「大規模な人間移動」の動きは、最終段階で倭国に及び、律令制度の導入・確立期に妹尾氏の指摘する諸特徴が現れる点は注目される。

3　仏教（世界宗教）・法律

妹尾氏は、農牧複合国家は世界宗教圏と密接に関連しあいながら誕生すると指摘している。[43] 農牧複合国家は、「4～7世紀の大規模な人間と文化の移動を経て誕生した。農業地域と遊牧地域を包含する遊牧・牧畜系国家」と定義され、ユーラシア大陸東部では北魏・隋・唐などが該当する。[44] 農牧複合国家は、古典国家とは次元の異なる複雑な種族構成と言語・文化を内包するが、その存立を世界宗教が保証すると同時に、「アフロ・ユーラシア大陸を東西に連結する大きな交通圏と商業圏を生みだした」[45]のである。

妹尾氏の見解による人間関係の変遷は図1[46]のようになる。妹尾氏によれば、四～七世紀は、社会秩序の激変期であった。

索　引

事　項

【あ】

アクティブラーニング　311, 322, 323, 325, 329, 334, 335, 337
乙巳の変　69, 185
今城塚古墳　76, 77, 88, 95, 97
AI　328, 329, 331, 332, 336
遠隔地交易　20

【か】

貴国　42–46
牛宿　302, 303, 305–308, 349
九誓幢（クソダン）　194, 206
百済王権（小百済国）　37, 186, 187, 190, 191, 202
牽牛星（彦星）　302–308
交易ネットワーク　22–24, 72, 79, 95, 100, 343–345, 347, 351–354
〈交換〉　75, 100
「交通」　1, 2, 4–9, 341
〈交通〉　1, 9, 23, 341, 342, 350, 352, 359
交通網　8, 9, 13, 26, 341, 352–354, 356
貢納―奉仕関係　34
古典国家　10–12, 18, 28, 341
午王山（ごぼうやま）遺跡　72
高麗郡　23, 70, 71, 201, 209–214, 216–219, 221–223, 225–227, 229, 231–234, 346, 347, 351

【さ】

執事省牒　271, 275, 276, 289–293, 295, 296, 348
史的長期持続　20
資本主義　18, 20–22
儒学（儒教）　6, 9, 14–16, 59, 63, 64, 72, 195, 248, 341–343
準構造船　77, 88
小高句麗（国）　188, 190, 191, 202
　金馬渚の――　188, 189, 191, 192, 198, 202
　漢城の――　189, 191, 192, 198, 202
　遼東の――国　189, 191, 202
新羅郡　71, 209, 210, 219–221, 224, 226, 227, 229–231, 234, 347, 351
壬申の乱　174, 175, 186, 197–199, 202, 222
〈世界＝経済〉（経済＝世界）　21, 22
世界システム　18, 19, 21, 22, 26, 29
世界システム論　18, 19, 21, 29
世界史探究　311, 312, 315–317, 349, 350
世界＝帝国　21, 22
ソグド人　15, 16, 72, 316, 342, 344, 350

【た】

太政官牒　275, 282, 284, 288, 291, 295, 348
張華　304, 306

帝国性　33, 34, 36, 37, 54, 155, 343
唐・新羅戦争（羅唐戦争）　23, 185, 186, 192, 193, 195-200, 202, 205, 346, 350
東部ユーラシア　23, 72, 100, 344, 345
斗牛（牛斗）　24, 301-304, 306-308, 349, 351
都市　7-11, 13, 14, 19, 26, 341, 342, 352-354, 356
斗宿　302, 303, 305-308, 349
都城　13-15, 25, 26, 182, 229, 342, 352, 353, 355
渡来系移住民　15, 23, 28, 59, 61-70, 72, 73, 331, 342-344, 351
　帰化人　6, 11, 15, 23, 25, 59-61, 69, 70, 72-74, 208, 238, 240, 331, 342-344, 351
　渡来人　11, 15, 23, 25, 41, 59-61, 72-74, 103, 106, 203, 208, 213, 228, 235, 237, 238, 240, 319, 331, 342-344, 351

【な】

二十八宿　302, 306, 308, 349
日本型中華思想（小中華主義・思想・帝国）　60, 61, 201, 232-234
日本史探究　311, 312, 315, 316, 349, 350
日本府　46-53
農牧境界地帯　10
農牧複合国家　9-13, 15, 28, 341, 342

【は】

白村江の戦い　68, 71, 74, 185, 186, 191, 197, 198, 203, 227, 346
ヒスイ　97, 122, 123, 141, 143
報徳国　189, 191
北斗七星　302, 303, 305, 307, 308

【ま】

靺鞨　189-192, 194, 196
文字　2, 5, 6, 9, 15, 53, 95, 131, 210, 248, 341

【や】

邪馬台国　3, 354-356

【ら】

羅唐戦争 → 唐・新羅戦争
領客府　194-196, 200, 289
礼部　194-196, 200, 289
歴史総合　312-316, 349, 350

寺 院 名

【か】

元興寺（法興寺・飛鳥寺）　34, 66, 67, 99, 156-158, 160, 164, 166, 169, 171, 173, 175, 177, 182, 183
弘福寺（川原寺）　156, 159, 160, 164-166, 168, 169, 171-178, 181, 183, 346

【さ】

坂田寺（金剛寺）　66, 156, 158-160, 171
崇福寺　155, 159, 161-165, 168-170, 172-176, 179, 346

【た】

大安寺（百済大寺・大官大寺）　96, 156, 159, 160, 164, 166, 168, 169, 171,

175–178, 181, 273
筑紫観世音寺　161, 164, 165, 168, 170, 172–177, 346
豊浦寺　157, 160, 171, 175, 183

【は】

法隆寺（若草伽藍）　103, 164–166, 168–173, 175–177, 180, 181, 183, 346

【や】

薬師寺　160, 164, 166, 170, 175–177, 179

人名・氏族名

【あ】

哀荘王　288
阿莘（阿花）王　36, 37, 43
阿知使主（阿智王）　62
穴太内人　254, 256
天日槍　83, 119, 121, 129, 140
安閑天皇　85, 99
伊岐博徳　70
韋昭　44
伊予部家守　248, 249
磐井 → 筑紫君磐井
斎部浜成　283, 288
王辰爾　16, 46, 64, 73, 87
近江臣毛野（近江毛野臣）　52, 75, 88
大伴岑万里　283, 288
意冨々等王　78, 82, 95
大神狛麻呂　221–223
憶礼福留　16, 69
忍坂大中姫　82, 83
小野篁　271, 272, 274, 277–280, 289–293, 296, 348
小野岑守　293

【か】

蓋鹵王（扶餘慶）　38, 39
観勒　67
紀三津　271–273, 275–277, 279–282, 288, 290, 293, 295–297, 348, 350
翹岐 → 豊璋
欽明天皇（紀・朝）　41, 46, 48, 49, 52, 53, 66, 87, 99, 100, 171, 175, 344, 345
百済王敬福　186, 228–231
百済王善光　71, 74, 186, 187, 227, 228
鞍作鳥（鞍作止利）　66, 158, 160, 171
継体天皇（朝・王朝・期・紀）　23, 46, 53, 75–79, 81, 82, 84–88, 90–92, 94–104, 106–111, 113, 123–126, 138, 140, 141, 146, 153, 344, 345, 351, 354–356, 359
　ヲホド王　76, 78, 79, 84, 90, 95–97, 99, 100, 125, 345
高安勝　189, 191, 193, 194, 198, 233
孝謙（称徳）天皇　71, 225
瓠公　116, 117, 121, 139
軍君（昆支）王　38–40
高麗若光　71, 191, 201, 209, 212–214, 225, 226, 232, 233, 347
高麗福信　71, 212, 222, 224–226, 230, 231
惟宗直本　70, 243, 264
剣牟岑　189, 191, 198

【さ】

螺（貞）江継人（さだえつぐひと） 256, 261
讃岐千継（ちつぐ） 257, 258
讃岐時人 257
讃岐永直 257-259
讃岐永成 257, 258
讃岐広直 257, 258
沙良真熊（さらまくま） 220
新斉都媛（しせつ） 37
持統天皇（朝・期） 3, 34, 41, 53, 72, 173, 179, 186, 200-202, 219, 220, 227, 231, 319-321, 347
司馬達等（しばたつと） 66
四比福夫（しひふくぶ） 16
称徳天皇 → 孝謙天皇
白猪史 16, 64
神文王（しんぶん） 197, 198
推古天皇（朝・期） 3, 33, 34, 41, 46, 53, 67, 95, 100, 171, 175, 180, 184, 344, 345
スサノヲ 115, 130, 137
細鳥女（セオニョ） 118
宣化天皇 85
僧旻（新漢人日文（にちもん）） 67-69
蘇我稲目 87, 157, 160, 171, 175
蘇我入鹿 69
蘇我馬子 158, 160, 171, 175
蘇我蝦夷 69
蘇軾（蘇東坡） 301, 306, 349
蘇定方 186

【た】

高向玄理 67-69
橘奈良麻呂 225
脱解尼師今（タレイサグム） 116, 117, 121
長寿王（巨璉（きょれん）） 39, 62
沈道古 290, 292
筑紫君磐井 75, 88, 97, 99, 138, 141, 356
都怒我阿羅斯等 120, 121, 140
恒貞親王 294, 295
津史 16, 64
腆支（直支（とき））王（てんし） 36, 37, 39, 40, 43, 44
天智天皇（朝・期・紀・系） 16, 23, 34, 41, 53, 69, 76, 155, 157, 159-169, 171-177, 179, 185, 197-200, 319, 320, 346, 351, 354
中大兄皇子 39, 68, 159, 169, 176, 177, 320
天武天皇（朝・期・紀） 3, 34, 54, 62, 160, 165, 166, 169, 173, 175, 176, 186, 199, 200-202, 319-321, 347
東城王 39-41
答炑春初（とうほんしゅんそ） 16, 69
伴善男 257, 294

【な】

中原（物部）敏久 253, 254, 256
奈勿王（なもつ） 40, 45
額田今足 253, 255, 259, 261

【は】

秦氏 15, 63, 70, 319
秦大麻呂 246
春澄善縄（はるすみのよしただ） 271, 293, 295, 296
彦主人王 79, 80, 82, 83, 96, 141
敏達天皇（朝） 46, 99, 166-169, 172
比智 40
卑弥呼 2, 3, 131, 356
藤原仲麻呂 71, 72, 223-225
藤原良房 277, 294
船史 46, 64
扶余隆 188, 192, 198, 202
文武王（ぶんぶ） 185, 193, 194, 197, 198
豊璋（翹岐（ぎょうき）） 39, 40, 74, 186, 187, 191,

198, 227, 239
宝蔵王　188-191, 202
朴堤上　45, 56

【ま】

未多王（また）　38-40
未斯欣（みしきん）（美海（みへ）・未叱喜（みじり）・微叱己知（みしこち）・微叱許智）　40, 45
道康親王 → 文徳天皇
都腹赤　293
木羅斤資　41, 43, 44
物部広成　223
物部敏久 → 中原（物部）敏久
物部守屋　158
文斤王（もんこん）　39
汶洲王（もんしゅう）　38
文徳（天皇）（道康親王）　257, 294
文武朝　34, 319

【や】

山田白金　246
東漢氏　61, 62, 319
大和長岡　246, 250
弓月君　63
延烏郎（ヨノラン）　118, 121

【ら】

李勣（りせき）　188, 225
劉仁願　188, 198
劉仁軌　186

【わ】

王仁（和迩吉師（わにきし））　15, 62, 63

史料名

【あ】

『海部氏勘注系図』　129
『海部氏系図』　129, 148
『粟鹿大明神元記（あわがはじめのき）』　130, 140, 149
『出雲国風土記』　121, 123, 134, 135
『伊予国風土記』　78
『延喜式』　93, 110, 135, 152, 154, 297
『延暦僧録』　163, 179
『大中臣本系帳』（中臣氏系図）　176

【か】

『懐風藻』　63, 174
『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』　99, 157, 175, 178
『菅家文草』　179
『漢書』　131, 294
『行基年譜』　222
『公卿補任』　224
『百済記』　33, 41-44, 54, 56, 343
『百済新撰』　33, 41, 56
『百済本記』　33, 41, 52-54, 56, 343
『旧唐書』　203, 204
『高句麗広開土王碑文』（碑文）　33-35, 37, 45, 54, 57, 317, 343
『後漢書』　294
『五教指事』　229
『国語』　44
『国司補任』　221
『古語拾遺』　283, 288
『古事記』　53, 54, 57, 62, 63, 81, 85, 86, 119, 123, 129, 137

『高麗氏古系図』　212
『今昔物語』　179

【さ】

『冊府元亀』　189, 191
『三国遺事』　33, 40, 118, 142
『三国史記』　33, 36, 39, 40, 44, 45, 54, 56, 116, 117, 142, 196, 204-207, 288, 343
『三宝絵』　179
「志賀伝法会」　179
『資治通鑑』　203, 205
『釈日本紀』　78, 79
『十七条憲法』　177
『宿曜経諸伝授纂要和解』　307
『周礼』　52, 249
『荀子』　83
『春秋』　248
『上宮記』　79
『上宮聖徳法王帝説』　99, 174
『聖徳太子伝暦』　223
『続日本紀』　62, 71, 156, 160, 164, 166, 170, 172, 174, 177, 179, 186, 187, 201, 203, 210, 211, 213, 216, 219, 220, 223-226, 228, 236, 237
『続日本後紀』　271, 272, 275, 282, 288, 290-296, 299, 348
『晋書』　294, 304, 309
『新撰姓氏録』　63, 66, 87, 120, 137, 226, 251
『新唐書』　204
『新編武蔵風土記稿』　71, 72, 212
『崇福寺縁起』　162
「崇福寺綵錦宝幢記（さいきんほうどうき）」　179
『政事要略』　244
『成宗実録』　122
『千字文』　15, 62
「前赤壁賦」　301, 306, 307, 349
『荘子』　294

【た】

『大安寺伽藍縁起幷流記資財帳』　178, 181
『大日本史料』　230
『大宝令』　53, 62, 243, 245, 262
『帝王編年記』　179
「禰軍墓誌」　302, 304, 306, 309, 349
「天智天皇建志賀寺語」　179
『藤氏家伝』　68, 98, 112
『土佐日記』　77, 88

【な】

『入唐求法巡礼行記』　281, 296
『日本紀略』　163, 179, 210, 248, 277, 278, 283, 287, 288, 295
『日本後紀』　283
『日本高僧伝要文抄』　163, 179
『日本三代実録』　126, 222, 223
『日本書紀』（書紀）　33-44, 46-54, 56, 57, 62, 67-69, 71, 74, 76, 81, 86, 91, 92, 96, 99, 106, 107, 115, 119, 120, 137, 138, 140, 141, 155-160, 164, 165, 170-175, 177, 179, 180, 184, 186, 187, 198-200, 203, 208, 210, 212, 219, 222, 227, 237, 299, 342, 343, 346, 354
『日本文徳天皇実録』　220, 272, 279, 281, 290, 292
『日本霊異記』　63, 70, 222, 228
『如意寺旧記』　184

【は】

『筥根山縁起幷序』　213
『扶桑集』　290
『扶桑略記』　66, 161, 163, 170, 179
『法隆寺伽藍縁起幷流記資財帳』　180

『法隆寺献物帳』　230, 237
『法曹類林』　256
『本朝法家文書目録』　244

【ま】

『民部省式』　221
『孟子』　83
『孟子集注』　83
『文選』　294

【や】

『養老令（養老律令）』　62, 70, 243, 250, 265, 348

【ら】

『礼記』　195, 249
『令義解』　244, 247, 253-255, 257, 259-261, 263, 266, 268, 294
『令集解』　23, 70, 243-245, 247-249, 251, 253-256, 258-269, 347, 348, 351
「跡記」　247, 250, 251, 258-263, 348
「穴記」　251-263, 265-268, 348
「古記」　244-247, 249, 253, 262, 265, 266, 348
「後讃」　257
「讃記」　255-260, 262, 267-269, 348
「朱記」（朱）　251, 259-263, 268, 269, 348
「堂讃」　257
「令釈」　247-251, 254, 259, 260, 262, 266, 348
『類聚国史』　295, 303
『論語』　15, 62, 249

【わ】

『和名類聚抄』（和名抄）　107, 210, 211, 220-222

研究者名

【あ】

青木和夫　245, 246, 265, 266
赤木隆幸　213, 218, 226, 234-236, 238
浅香年木　136, 152
阿部裕俊　152
網干善教　178
海部（あまべ）元彦　148
網伸也　228, 239
新井喜久夫　104
新井孝重　240
荒井秀規　26, 74, 201, 208, 212, 213, 232, 235, 237, 239, 240
荒川史　110
嵐義人　262, 269
アンドレ・グンダー・フランク　26, 29
家永三郎　184
五十嵐基善　200, 207
池内宏　205
石井正敏　152, 271, 283, 288, 297, 298
石野博信　140, 153
石原進　103, 105
石母田正　2, 4-6, 9, 24, 25, 341
伊藤秋男　104
伊藤雅文　146
井上辰雄　247, 248, 250-252, 257, 259, 266-269
井上主税　153

井上秀雄　142, 204, 205-207
井上光貞　74, 207, 245, 246, 248-250, 254, 255, 258, 260-263, 265-269, 355, 357
井上洋一　149
稲葉通邦　257, 268
荊木美行　265-269
李炳魯（イビョンノ）　204
今尾文昭　137, 152
今谷明　106, 111
イマニュエル・ウォーラーステイン　18-22, 26, 29-31
岩垣雄一　147
石見清裕　297, 309
植田喜兵成智　205
上田正昭　106
上原眞人　183, 228-230, 239
ウォーラーステイン → イマニュエル・ウォーラーステイン
内田保之　112
内山敏行　73
宇野隆夫　102
梅沢重昭　73
梅原末治　102, 149, 150
遠藤慶太　41, 44, 56, 57, 299
王健群　35
王連龍　308
近江昌司　225, 238
大河内隆之　180
大隅清陽　208
大竹弘之　104, 153
大谷治作　106
大橋一章　177
大橋信弥　74, 102
小笠原好彦　181
岡村秀典　150
岡本公樹　146
沖森卓也　112
小口雅史　55, 264
小澤実　321, 339
押部佳周　245-251, 256, 258, 259, 261, 266-269
小田富士雄　138, 152, 153

【か】

甲斐孝司　152
垣田平治郎　144
柿沼亮介　232, 240
筧敏生　39, 56, 192, 203, 204
梶原義実　181
片多雅樹　152
片山長三　108
加藤かな子　240
加藤謙吉　73, 81, 103, 212, 225, 235, 238
加藤恭朗　227, 233, 236, 238, 239, 241
上遠野（かどの）浩一　108
門脇禎二　91, 102, 106, 107, 115, 116, 130, 141, 148, 149, 153
鐘江宏之　208
金子修一　296, 297, 309, 348
兼康保明　102-105
上垣外憲一　106, 142
亀田修一　73, 74, 152, 153, 169, 182
亀田隆之　247, 248, 266, 299
カルロス・アントーニオ・アギーレ・ロハス　30
河合美喜夫　314, 332, 337
河上麻由子　100, 113
川北稔　26, 29-31
河野（かわの）一隆　145
河野義礼　145
韓昇　100, 113
韓茂莉　26
岸俊男　81, 245, 265

鬼頭清明　199, 203, 207
木下礼仁　41, 56
君島和彦　315, 333, 337
金恩淑（キムウンシック）　296, 298
金廷鶴（キムジョンハック）　122, 145
金素雲（キム ソ ウン）　142
金天鶴（キムチョンハック）　239
木村誠　205, 207
楠原佑介（くすはら）　357
久保亨　314, 332, 337
熊谷公男　37–40, 51, 55–57
蔵中しのぶ　179
栗原朋信　44, 45, 57
黒板勝美　179
黒田晃　73
ケネス＝ポメランツ　113
計良勝範（けら）　143
計良由松　143
河内春人　296, 356
小島憲之　290, 298
小林行雄　145
是沢恭三　149

【さ】

斎川真　243, 264, 265, 269
佐伯有清　45, 55, 57, 280, 288, 290, 296, 298
早乙女雅博　145
酒井清治　38, 56
坂上康俊　208
坂本太郎　74, 174, 175, 180, 182, 208, 245, 265, 295, 299
櫻井信也　179
笹山晴生　299
笹生衛　111
佐藤晃一　147
佐藤誠實　252, 254–256, 267
佐藤利行　306, 309
サミール・アミン　26
潮崎誠　144
清水昭博　183
清水眞一　144, 145
ジャネット・リップマン・アブー＝ルゴド　29
白井忠雄　103
白石太一郎　38, 56, 84, 100, 101, 104, 106, 109, 169
申敬澈（シンギョンチョル）　153
神野清一　253–256, 258, 259, 263, 267, 268
末松保和　53, 57, 206
菅政友　34
杉原和雄　147, 148
杉本宏　110
鈴木治　203
鈴木景二　110
鈴木正信　213, 221–224, 231, 233, 235, 237, 238, 240
鈴木靖民　14, 26, 27, 37, 55, 199, 200, 207, 208, 231, 240, 297, 303, 309, 343
須田勉　74, 227, 229, 230, 234, 236, 239, 346
スティーヴン＝トピック　113
妹尾達彦　7–19, 23, 25–30, 72, 100, 113, 341, 342, 344, 352–357, 360
関晃　61, 69, 72–74
瀬戸谷晧　149, 150
千田稔　148
曹喜勝　151
徐栄教（ソ ヨンギョウ）　205

【た】

高久健二　153, 343
高田良信　181

高橋一夫　234, 238, 240, 346
高橋克壽　146
高橋工　108
高橋徹　148
高橋昌明　111
高松雅文　94, 111
瀧音能之　140, 151-153
瀧川政次郎　243-247, 250-252, 254, 257, 264-269
竹内理三　179
武澤秀一　165, 180, 182
武末純一　152
武田幸男　40, 45, 55-57
竹原伸仁　180
武光誠　166, 167, 172, 181
田島公　298
田代弘　143
多田圭介　299
田中勝弘　81, 102, 104, 105, 109, 112, 146
田中晋作　101, 112, 153
田中卓　178
田中嗣人　180
田中史生　61, 71, 73, 74, 100, 107, 201, 203, 208, 220, 226, 228, 231, 232, 236, 238-240
田中義昭　151
田中良之　74
玉岡兼治　295, 299
茅原（ちはら）一也　145
鄭（チョン）淳一（スニル）　271, 297
塚口義信　90, 107, 109
津田左右吉　205
土田孝雄　145
都出比呂志　107, 110
常松幹雄　150, 151
寺村光晴　145
東野治之　100, 113, 297
富元久美子　213, 216, 217, 225, 233, 235, 236, 238, 241
虎尾俊哉　110, 152
鳥山孟朗　313, 332, 337

【な】

直木孝次郎　181
中井真孝　177
長瀬一平　186, 187, 203
中田薫　244, 245, 247, 265, 266
中司照世　110
中平薫　218, 236
那珂通世　34-36
中村順昭　212, 224, 225, 230, 235, 238
西川寿勝　101, 104, 105, 112, 113
西田俊秀　107
西宮一民　246, 266
西本昌弘　239
仁藤敦史　42, 56, 75, 99, 100, 174
根本靖　236
野尻抱影　307, 310
野尻与之佐　143

【は】

長谷川修一　321, 339
畑中英二　112
畑中誠　102, 103
土生田純之　73
馬部（ばべ）隆弘　107
濱修　110
浜田久美子　271, 292, 296-298, 309
濱田耕策　45, 57, 206
濱田清陵（耕作）　102, 107
早川庄八　254, 264, 269
早川泰弘　145
林紀昭　253-255, 263, 268

林博通　102–105, 174, 178, 181, 182
原島礼二　221, 222, 224, 237, 238, 240
原恵　307, 310
伴とし子　148
坂野千登勢（ばんの）　238
比佐陽一郎　152
菱田哲郎　183, 184
日野開三郎　189, 204
平野邦雄　62, 72, 100
平野寛之　233, 234, 241
広瀬和雄　147, 148
福永伸哉（しんや）　111
福永光司（みつじ）　148
福山敏男　171, 178
藤岡大拙　144
藤田富士夫　139, 146, 148, 152, 153
布施弥平治　257, 258, 263, 268
ブルース・バートン　29
古畑徹　204
ブローデル　19–22, 30
北条秀樹　255, 256, 258, 259, 263, 268, 269
洪潽植（ホンボシック）（홍보식）　139, 153

【ま】

前島己基　144
前野直彬　306, 310
牧野隆信　143
町田甲一　184
松井透　29
松浦宇哲　95, 111
松岡静雄　147
松尾光　61, 73
松田好弘　197, 207
松葉竜司　110
黛弘道　60, 72, 247, 250, 252, 254, 266, 267
丸山竜平　103, 105
三池賢一　207
右島和夫　73
三品彰英　41, 56, 142
水谷千秋　101, 102
水野正好　109
水本浩典　264, 269
光谷拓実　180
三舟隆之　157, 177, 178
宮川徙　112, 124, 146
三宅米吉　34
宮島一彦　308
宮瀧交二　201, 208, 220, 221, 232, 237, 240, 347
村上四男　189, 204
森郁夫　156, 166, 171, 176–178, 180–184
森克己　271, 297
森公章　53, 57, 113, 149, 203, 271, 296, 297
森浩一　87, 102, 106, 107, 115, 116, 142, 145, 153
森田克行　77, 78, 88, 89, 91, 100, 101, 106, 108, 109
森田悌　237, 240, 253–255, 258–261, 263, 268, 269, 347

【や】

山尾幸久　36, 44, 55, 56
山崎雅稔　297, 298
尹善泰（コンソンテ）　282, 289, 296, 297
横田洋三　102, 111
吉田晶　109, 113
吉田孝　207, 254, 255
吉村武彦　35, 55, 61, 73, 110, 113, 180
米田克彦　144
米田雄介　256, 268
米山宏史　312, 313, 332, 337

【ら】

利光三津夫　243, 244, 256, 264, 265, 268, 269
李進熙　34
ルゴド → ジャネット・リップマン・アブー＝ルゴド
ロハス → カルロス・アントーニオ・アギーレ・ロハス

【わ】

若井敏明　176, 180
和田萃　82, 84, 101, 104–107, 109, 110
和田一之輔　104
割田聖史　313, 332, 337